



～輝きの子育て～



根っことなる大切な乳幼児時期

「パパおかえりなさい」「ママ早かったね」「ありがとうございました」「おかえりなさい」一階の廊下から皆さんの明るく、元気な声が二階事務室まで聞こえてきます。保育室からは子ども達の元気な歌声、話し声、笑い声が手に取るように事務をしても聞こえてきます。時に、大きな泣き声が聞こえると心配し、あれは誰かな？と下へ降りてみて「なんだ、お迎えで何かダダをこねているらしい」ということもあります。ちょっとした泣き声でも気にかかります。

最近、コロナ禍の中で辛い生活に苦しんでおられる方も多いかと思いますが、このところ芸能界での若者の自殺等のニュースを耳にしますと何故？と思います。華々しく輝きながら、本来なら明るい未来が約束されそうな人たちののに…。人の幸せとは何なのだろうかと考えさせられます。我々は元気な子ども達と向き合える日々幸せを感じます。

私が園長を始めた頃、研修で佐々木正美先生の講演を聞き、深く感銘を受けたことを覚えております。最近、購入した「心、揺るがず講演を読むーその生き方、その教え、講演から学ぶ」の本の中に佐々木先生の一説が載っていました。

子どもが望んでいるように愛していますか？

自分が望む愛し方をしていますか？

子育てというのは最初がよければ大抵すべてうまくいきます。

反対に最初がいろんな意味でつまずくと発達に飛び級はありません。つまずいたら必ずそこからやり直しをしなければなりません。乳幼児期に不足したことを思春期・青年期にやり直そうとしてもなかなかできないことが多いです。その結果、その人は人生をいろんな意味で歪んだ状態で送らなければならないとなってしまいます。ある意味では人生は不公平なものだと思っています。特に、育てられ方の不公平さは非常に大きいです。だが、育てられ方が完全だったという人はいないわけで、程度の差はあれ、不十分さがあって当然です。年齢や発達に寄り添う子育てをしながらその不足、不十分さを必要な時におぎなっていくことが大切です。

まず乳児期です。乳児期の子どもを育てるときに大事なことは、「基本的信頼」を育むことです。「基本的信頼」とは、自分を育ててくれている人に対する信頼感です。この信頼感の大きさが将来的には自分に対する信頼そのものになります。相手を信じることと自分を信じることは表裏一体なのです。自信のない人は大概人を信じる力が弱いのです。まず赤ちゃんの時期に人を信じる力をしっかり育てられることが非常に重要です。その対象はほとんどの場合はお母さんです。が、必ずしも絶対お母さんでなければならないということではありません。基本的にはお母さんですが、母親的な人でもいいのです。「基本的信頼」を乳児期にしっかり自分の中に育てることができた人は、希望を持って生きていくことができます。反対に「基本的信頼」を育むことができず、周囲の人に対して不信感のような感情を持ってしまうと、子どもは希望を持って生きていくことができなくなります。このことを発達心理学者のエリクソンは「引きこもり」と言っています。今、日本の子どもや若者を見ていて、エリクソンが言った「引きこもり」ということの意味合いの深さを、強く感じます。

「無条件に愛されている実感を！」

多くの大人は子どもではなく自分が望む愛し方をしているのではないのでしょうか？「勉強が一番になって欲しい」「運動会のかけっこが一番になって欲しい」こういう気持ちが強ければ強いほど、子どもは「親から本当に愛されている」という実感は得られません。そして、その子は親に愛着形成できなくなります。なぜなら過剰期待の本質は「現状のあなたでは満足できませんよ」と言われているのと同じことだからです。思春期・青年期の子どもが荒れることの背景に、この過剰期待があるとされています。無条件に愛されているという実感を子どもに与えましょう。そうすることで子どもは周囲の人を信じるようになるのです。

私が園長の頃、保護者に良くお話させて頂いたことがあります。乳幼児期は植物で例えるならば、根っこの時期です。根っこがしっかりと張り、太い幹に育つこと、これがとても大切である。そうすることで、枝が張り、葉をつけ大きな大木になります。万一、嵐がきても、吹雪になろうが、葉はおちても、また枝が折れようとも、太い幹から再び芽が出て枝となり、葉が茂りいずれ花を咲かせることでしょう。乳幼児期のこの頃に太い根っこを育てることがいかに大切なことであるかをお話させて頂きました。

このしっかりとした根っこを育てる上で最も大切なことは、小さい時、乳幼児期に一番身近で大切にされるべき人との信頼関係が出来ているかどうかだと思います。長い人生の中にはいろいろな事があります。嬉しいこと、悲しいこと、辛いこと、体が思うように動かないこと、自分の思うようにならない事は人の常です。それでも多くの人は頑張り、悲しみに耐え努力するしかないのです。そこで初めて大きな枝となり花を咲かせるのではないのでしょうか。

前記の「心、揺るがず講演を読むー」の本の中にIPS細胞でノーベル賞を受賞された山中伸弥先生の講演のお話も掲載されていました。

アメリカ留学からネズミ三匹を持ち帰り、研究に打ち込むことになりましたが、その内ネズミは二百匹となり、ネズミの世話と、研究に打ち込む日々気持ちも萎え、鬱病になられたそうです。そのような中でも、神のお告げもあったのでしょうか、ノーベル賞を頂く程に研究に打ち込まれました。やはり、しっかりとした根っこを持ち、太い幹を持った精神力だったのではないかと思います。毎日、登園してくる子どもたちが日々楽しく、笑顔で過ごせ、身近な人からの沢山の愛を頂き、人を信じる力がつき、自分をも信じられるたくましい精神力を持った大人に成長して頂くことを願います。

最近、少し気になることがあります。スマホにのめり込み、子どもと目を合わせての会話が少なくなっているのではないかと思います。赤ちゃんの時でもお母さんとお話したいのです。おっぱいをあげるのでも目を合わせてあげて欲しいと思います。赤ちゃんでもびっくりする程に可愛い反応を見せてくれますよ。

片野 英子

参考文献：「心、揺るがず講演を読むーその生き方、その教え、講演から学ぶ」
監修・編集 水谷 もりひと